
魔法先生ネギま！ 平安の鬼

オルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ 平安の鬼

【Nコード】

N7002T

【作者名】

オルカ

【あらすじ】

処女作となります。

修学旅行で関西呪術教会のいざこざに巻き込まれてしまったネギたち一行。

このかが攪われ、天ヶ崎 千草を追い詰めるがそこで鬼を召喚する千草。その中に・・・？

プロローグ（前書き）

まだプロローグですがよろしくお願いします！

プロローグ

「そこまでだ！お嬢様を放せ！！」

野太刀を構え、サイドポニーの女生徒が叫ぶ。精悍な顔つきをしており、10人中8人はその姿に目を奪われるであろう、京美人と言っても差し支えない美少女だ。名は桜咲 刹那。対魔物剣術、京都神鳴流剣士である。

両脇には同じくスチールでできたようなハリセンを構えた、オッドアイのこれまた美少女と杖を構えた赤毛の少年がいる。

どちらも勇ましい顔つきをしており、少年少女には多少似つかわしくない表情であつた。

彼らの見詰める先には大きなトンボ眼鏡をかけ、肩口から背中を大きく開けた着物を着た女性と大きなサルの着ぐるみのような式神。

それに抱かれ手を拘束され、お札で猿轡を噛まされているが婉然な黒髪を式神の腕から顔を覗かせる少女。

そして、何か得体の知れないものを感じさせる詰襟の制服を着た白髪の少年。

着物の女性、天ヶ崎 千草が答える。

「……またあんたらか」

その後ろで必死に式神の腕の中から黒髪の少女が逃れようとする。

しかし、非力な少女の力では敵わない。

「天ヶ崎 千草！明日の朝にはお前を捕らえに応援が来るぞ、無駄な抵抗はやめ投降するがいい！！」

神鳴流剣士、刹那の言うとおりだ。

既に関西呪術教会の長が手を回し、千草を捕らえるために応援が来る予定だ。

しかし、彼女は切り札を手に入れた。

赤毛の少年。ネギ・スプリングフィールドの父、英雄、サウザンドマスターとも称されるナギ・スプリングフィールドをも凌ぐ魔力を持つ、式神の腕の中に居る少女。

近衛このか

彼女の魔力を用いて、飛騨の大鬼神 リョウメンスクナノカミを復活させることが目的だ。

二面四手の巨軀の大鬼でかつては飛騨国に現れ、朝廷に背いて民衆を苦しめていたそうだ。

そんな大鬼の封印が解かれれば腕利きの呪術師だろうとひとたまりもない。

ここにいる少年少女達は露とも知らないだろう。それだけの切り札を持つている千草からすれば余裕すぎてへそで茶が沸く思いだ。

「ふふん・・・応援がなんぼのもんや。あの場所まで行きさえすれば・・・」

そつ、この壮大な計画もあと少しで達成することができる。

あとはリヨウメンスクナノカミが封印されている祠まで行き、儀式を行えばこっちのものなのだ。

そこで千草は思った。そうだ、ちょうどいい。このガキどもにこの魔力タンクの力を見せてやろうじゃないか。

「あんたらにもお嬢様の力の一端を見せたるわ。本山でガタガタ震えていれば良かったと後悔するで？」

懐からお札を取り出し

「お嬢様・・・失礼を」

このかの胸元に貼り付けた。このかが悩ましい声をあげた途端、刹那が青筋を立てるが、それどころではない。

この女は一体、何をするつもりなのだと思うのも束の間。千草が物語の幕を開けた。

「オン」

千草とこのかの周りに呪術陣が浮かび上がる。

「キリ キリ ヴァジャラ ウーンハッタ」

召喚呪術。

数多の鬼を呼び寄せてビビらせてやろう。

「ん んっ・・・」

魔力が行使されるたびにこのかが悩ましい声を上げる。

「お嬢様!!」

「このか・・・っ・・・!??」

ネギたちがこのかの身を案じるも呪術陣から大量の鬼、鬼、鬼。

明日葉が涙目になりながら悲鳴を上げる。

このかの魔力で手当たり次第に呼び寄せられた鬼達に囲まれているのだ。普通の女子中学生からすれば恐ろしいことこの上ない。

ネギも唾を飲み込み、あぐねている。

「あんたにはその鬼どもと遊んでてもらおか。ま、ガキやし殺さんよーにだけは言っとくわ。安心しときい」

この間のお返しだ。指をくわえてみている。

「ほな」

「まつ、待て!!」

待てと言われて待つ馬鹿がいるかと言わんばかりに千草は祭壇を指す。

この時、千草はミスを犯した。

少年少女の力を見誤ったのと召喚した鬼達の中の異変に気づけなかったことだ。

そう、千草は物語の幕を開けたのだ。

「こ、ここはどこ・・・?」

プロローグ（後書き）

妄想の産物です。

小説って考えてる最中は楽しいんですけど、いざ書いてみるとやっぱり大変ですね。

定期的に連載されている方を尊敬します。

これから頑張っていくのでよろしく願いします！

第一話 その1（前書き）

お気に入り登録に評価ありがとうございます！

大変遅筆すぎて申し訳ない上にこの文章量ですが、お楽しみいただければ幸いです！

てか、一月もかかってこれとか・・・。

第一話 その1

「こ、ここはどこ・・・？」

召喚された鬼達の中に一際異彩を放つ存在があった。

どこからどう見てもただの少年が居たのだ。

ざんばら髪に幼さを残した不安げな表情。

身に着けている服は裾はボロボロでなんとも小汚い印象を受ける。

「な、なんで人間が召喚されとるんや？」

鬼達も困惑を隠せない。

しかし、召喚された中でそれなりに高位の者達は気づいた。

「坊主・・・、頭領の子か!？」

「なんやてえ!？」

他の鬼達は慄いた。

周りの鬼から親分と慕われている鬼が言う頭領という鬼、それはかの有名な酒吞童子のことであった。

酒吞童子

かつては京都と丹波国の国境に住んでいたとされる鬼の頭領である。他の呼び名として、酒顛童子、酒天童子、朱点童子と書くこともある。

彼が本拠とした大江山では龍宮のような御殿に棲み、数多くの鬼達を部下にしていたと言われる伝説級の鬼である。

その出生には諸説あるが、どれもが大酒飲みの暴れん坊という絵に描いたような鬼そのもので、日本最強の鬼と呼ばれる存在だ。

「あ、あの酒呑童子様の・・・」

「そうや、間違いあらへん。この坊主から頭領の力を感じるわ。」

鬼達は混乱を隠せない。一見ただの幼い子供が自分達を纏め上げ圧倒的な力を振るっていた鬼の力を受け継いだ者だなどと誰が思うだろう。

混乱しているのは対するネギらも同じだった。そう明日菜達と年の変わらない少年が召喚された鬼達にまぎれているのだ。

助けるべきか、それとも鬼が化かしているのか。判断が付かない状況であった。

しかし、一番混乱しているのは何を隠そう召喚された少年であった。

え、何？なんなのこの状況！？

呪縛が解かれたと思ったたらたくさん鬼たちと一緒に外に放りだされるしさ。

おまけに水が冷たいよ……。

それにここは一体どこなんだろう？

そもそもなんで封印が解けたのかな？

話には聞いていたけど千年以上も経ってるなんて信じられないよ。

でも、どう見ても……えーっと、外国人っていうんだっけ？

杖を持っているし、あれは陰陽術師じゃなくて西洋魔術師かな。赤毛だしこの国の人間じゃないんだろ？な……。

ということは空を飛ぶ鉄の船で外国人はこの国に来るって、酒呑童子の言ってた事は本当だったんだ！

「風花旋風・風障壁！！」

なんてことを考えていたら突然、竜巻が起こって鬼と外国人の子達とを分けてしまった。

「坊主、ここは戦場になる。下がるとき」

「あの子達と戦うの？」

「せや、ワシらはそのために呼ばれたんやからな」

「僕もやる」

だからこそ、僕はここにいるんだろう。封印が解けた理由は分から

ないけど呼ばれたのならやろう。
僕は 鬼 なのだから。

一方、風障壁により時間を稼いでいるネギらはこのか奪取作戦を立てていた。

「鬼どもは姐さんと刹那の姉さんが引き付けておく！！兄貴は一撃離脱でこのか姉さんを奪取！！あとはみんなで全力で逃げて本山に向かつてる援軍を待つって寸法だ！！どうだ！？」

ネギの使い魔であるアルベール・カモミールが作戦の概要を伝える。刹那もそれに対しての穴を指摘はするが現状この作戦が現在行える中で出来る作戦であった。

「それにしてもあの男の子は大丈夫なの？」

「確かに彼のことも気になりますね。なぜ鬼達と一緒に召喚されたのでしょうか？」

「てゆうか、助けたほうがよかったんじゃない？」

「いや、鬼と一緒に召喚されたんだから奴も鬼なんじゃねえか？」

各々、思うところはあるが今はこのか奪還という目的がある。

彼が何者なのか確かめたいところではあるが、今はその議論をしている場合ではない。

もうすぐこの風障壁も止んでしまい、否が応にも先ほどの作戦を実行しなければならない。

「先生、このかお嬢様を・・・頼みます!」

「・・・はい!」

風障壁が止む寸前での一言。

ネギは真剣な刹那の目に固く誓った。必ずこのかを助けてみせると。

「風がやむ!」

カモが皆に伝える。本当はネギと刹那が仮契約してくれればもう少し作戦の成功率もあがると踏んでいたが、鬼の中にいた少年に皆、気を取られてしまった。

おそらく、今一番のイレギュラーなことだ。普通、ああいった召喚では人間が召喚されることはまずない。

爵位級の悪魔というわけでもないはずだ。堂々巡りの考えに終止符が打たれる。

「来るわよ!!」

明日菜の声と共に風障壁が止み始めた。

頭を切り替え、これからのサポートに全力を尽くさなければ。

先んじて、ネギは【雷の暴風】を詠唱している。

最も長い修学旅行の夜が始まるうとしていた。

「そろそろか……。ふふん、待たせよってからに……。！」

大鬼がようやくかと構え直す。

が、百戦錬磨の大鬼は気づく。気とは違うエネルギーが風の中から現れた少年に集まっていることを。

「雷の暴風！」

魔力によって練り上げられたエネルギーが放出され、射線上にいた鬼達が一掃されてしまった。

「おおお！！西洋魔術師かあ！？」

鬼達が突然の攻撃に怯んでいる隙にネギとカモはこのかを目指し飛んだ。

しかし、飛んでいったのはネギとカモのみ。

あの竜巻の中心からスチール製ハリセンと野太刀を携えた少女が二人。

「こいつは勇ましいお嬢ちゃん達やな」

鬼達が笑いながら彼女達を囲みこむ。

喚よばれたからには手加減するわけにはいかない。

しかし、少女達は勇ましく、武器を構え

「じゃあ、ま・・・鬼退治といこーか!!」

「はい！」

翔ける。

駆け出した二人の少女は一騎当千の如く、瞬く間に鬼達を還してゆく。

明日菜は動きや一振り一振りが荒いが持ち前の運動能力を生かし、自在にハリセンを振り回している。

刹那は明日菜をフォローしつつも明日菜以上の速度で鬼達を切り伏せていく。

こついうのを美しいというのだろう。

だが、この数を相手には素人を抱えながらではあの退魔師も辛いだろう。

下級の鬼達には悪いが、召喚された以上は役目を果たさなければならぬ。

先に低級の鬼達に攻撃させ、体力が消耗したところを高位の鬼が倒す。

だが、馬鹿正直に突撃しているわけではないのだ。

その証拠にだんだんと少女達の柔肌に傷が増えていく。

予想外なのは思った以上にやるという程度だった。

そして烏族が仕掛ける。

あつという間に明日菜は捕らえられてしまった。

向こうからしてみれば万事休す。

更に追い討ちをかけるかのごとく、こちら側の神鳴流剣士も到着。

儀式も完成に近づいている。

が、ここであちらにも援軍が到着したようだ。

ボルトアクション式のスナイパーライフルを掲げている長身の少女とチャイナ服を着ている少女の二人。どちらも褐色の肌をしている。

この二名の参戦により、戦局は混迷することとなる。

さて、ここで一切動いていない者が一人いる。

鬼と一緒に出てきた少年だ。

この少年、ネギ達との戦線が開いてからというものずっと情報収集をしていた。

式を飛ばし、現代の情報を集めている。

今が平安の世からどれくらい後の時代なのか、ここはどこなのか。思いつく限り、調べられることを全て洗う。

そして、自分を鬼の世界に封印したあの退魔師集団、神鳴流。

幸いにもあの剣士も神鳴流の一人らしい。

彼が行うのは復讐。

鬼を助けたからという理由で自分を殺そうと封印し、家族や父が治

めていた土地を焼き払ったあの連中を許すわけにはいかない。

復讐は悲しみを呼び、悲しみは更なる悲しみを呼ぶ。

そう言った親代わりの鬼の言葉は理解できたが、それでもこの心に燦っている火種はそうそう消えるものではなかった。

まだだ。あの大鬼はこの場では自分が大将だと言った。ならば出るのは最後。

それまでは調べられることは調べておこうと決めた少年であった。

第一話 その1（後書き）

主人公の名前は次回紹介いたします。

というか、全然物語進んでないよ・・・。

おまけに短い。さらに遅い。

あれ、酷くね？

こんなのでよろしければお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7002t/>

魔法先生ネギま！ 平安の鬼

2011年10月8日22時06分発行